

オックスフォード大学の日本語教育

岡野喜美子

英国オックスフォード大学の日本語科（日本科と訳すべきか）で私が lecturer（非常勤講師）として教壇に立ったのは、1978年から1979年にかけての1年間であった。この間に経験し、見聞したことを通して、オックスフォード大学での日本語教育を紹介するのが本稿の目的である。が、なにぶん、短期間のため日本語科を取り巻く複雑な機構を完全には理解していないおそれがある。また、専任の lecturer（日本でいえば助教授にあたるるか）二人のうち一人が途中から日本へ研究出張して不在であったなど、変則的な一年であったようであるし、たまたま私の教えた1年間をもってオックスフォード大学ではこうであると断定すべきではあるまい。しかし、意外に知られていないオックスフォード大の日本語科の様子、教材、カリキュラム、学生気質など、オックスフォードらしい雰囲気とともにお伝えすることはできると思う。

I. オリエンタル・インスティテュート

オックスフォード大学の日本語科は、正確に言うと、オックスフォード大学オリエンタル・インスティテュート日本語科である。オリエンタル・インスティテュートというのは、語研のような大学附属機関であるが、言語—中国語、日本語、アラビア語、ヒンドゥ語、トルコ語、ペルシャ語、ヘブライ語、サンスクリットなど—に限らず、東洋学を志す者はほとんどすべてここで受講することになっている。性格としては、単なる語学部ではなく、文学を中心とする日本学、中国学といった色彩が濃いようである。

日本語科には、昨年度（1978～1979年）の場合、学部学生のみ9名が学んでいた。人数としては少ないが、皆、日本（語）専攻である。彼らは授業のほとんどをオリエンタル・インスティテュートで受けるが、それぞれ異なるコレッジに所属し、原則としてコレッジ内に個室を与えられ、そこを食住・交友という生活の場としている。専攻によっては自分のコレッジで受講することもあるが、他のコレッジの講義に出かけて行くことが多い。日本語のように特殊な専攻になれば、コレッジから毎日のようにオリエンタル・インスティテュートに通うことになるが、その学生にどこの学生かと聞けば、セント・ジョンズ・コレッジとかモードレン・コレッジという答えが返ってくる。

日本語科の教授陣は専任二人と非常勤二人であった。二人の専任レクチャーは大学院コレッジであるセント・アントニーズ・コレッジ本属で、インスティテュートとコレッジ両方に研究室を持っている。一人のレクチャーは日本の新劇の研究者パウエル博士、もう一人は儒学の研究者マクマレン博士である。ちなみに、セント・アントニーズ・コレッジにはほかに日本史の研究者一人、また、ファー・イースト・センターという機関もあり、学期中毎週1回は日本セミナーが開かれ、熱心な学生は出席するなど、オックスフォードの日本学はこのコレッジを中心に動いていると言っ

てよい。

コレッジ制度もそうであるが、オックスフォード大学は、ケンブリッジ大学とともにイギリスでも独特の大学制度を持っている。このオリエンタル・インスティテュートでの日本語教育も、ただ単に、何の教材を使い、どういうカリキュラムを組んで、どう教えているのかを述べただけでは言い尽くせないところが多いように思う。起源は12世紀にさかのぼるとい

この大学の伝統の重みは日本語科に語学教育にとどまらない深い内容を与えているが、一方、現代に必要な改革をはばんでいることもあるように聞いている。

以下、大学制度の一端に触れながら、教材、カリキュラムなど、日本語教育の具体的な姿を紹介したい。

II. 制度

修業年限……私にとって意外であったのは、日本語専攻の学部学生の場合、修業年限が3年ということであった。日本語より規模の大きい中国語は4年制である。ロンドン大学などの日本語が4年制であることを考えなくとも、3年間は短い。東洋語は、フランス語やドイツ語（日本語科の学生もほとんどは、これらヨーロッパ語の4技能を身につけたうえで入学してくる）などと違ってゼロからの出発であるから、むしろ長くても不思議はない。しかし、一方、日本の大学のような教養課程がなく、1年生入学の初日から専門科目だけに集中した勉強生活を始め、3年間これを続けるという意味では、4年制の日本の大学より集中期間は長いとも言える。この現行の3年制については、いずれ4年制にしたい意向であると専任から聞いたことがある。たしかにあと1年の延長はぜひともほしいところである。

学期・授業時間数……オリエンタル・インスティテュートの1年は3学期（Michaelmas Term, Hilary Term, Trinity Term）に分かれ、各学期8週間ずつである。年間24週間という授業期間は語学の訓練にとっていい条件とは言えない。しかも、1週あたりの授業時間数は最も多い1年生でも10コマ（1コマ実質55分）ほど。この点、より大きな日本語教育機関を持つロンドン大学に比べても、週に数時間は少ないということであった。もともと自習に慣れているこの学生たちのこと、授業の合間にはもっぱら辞典・参考書を図書室の机の上に積み上げて、エッセイ（レポートのこと）を書いたり、ブローズ（英文和訳）の宿題をしたり、下調べに余念がない。このアンバランスとも思える学習のスタイルは、結果的にこうなっただけでなく、伝統的学風、教育理念と無関係ではない。

試験………エッセイの提出は毎学期あるようであるが、いわゆる試験の回数は非常に少ない。少なくとも早稲田での日本語教育でいえば、数課ごとの試験、期末試験、クイズなどはあたりまえになっているが、このアメリカ式（と言ってよいと思うが）の頻繁なテストというのは、マスプロでない教育からは生まれない発想かもしれない。オックスフォードの学生にとって、試験は、回数が少ないかわりに重大な意味を持っている。3年間在学中、公式に大きな試験は1年生3学期末の **First Public Examination** と、卒業試験にあたる3年末の **Second Public Examination** の二つだけであり、ほかに1年の1学期末に学生の適性を調べる学力試験がある。1学期目の試験、あるいは **First Public Examination** で悪い成績をとろうものなら、他の学科への転科を勧められるとあって、学生は顔色を変えて勉強する。日本でいえば、まるで大学入試前の受験生といった様子である。無事これに合格すると、2年度は試験がなく（このあたりで、学習動機の強い学生とそれほどでない学生との差が出てくる）、3年末の卒業試験である **Second Public Examination** まで何もない。私は、漢字や文型の小さなテストを何回かしたが、「試験」という意識は双方になかったように思う。

卒業前の、数日間にわたる **Public Examination** を控えて、5、6月の緊張と猛勉ぶりは最高潮に達する。そして、当日、ガウンはもちろん、黒の上下、靴下まで黒といういでたち（女子学生も黒服、黒ストッキング、白ブラウスにガウンである）でないと試験場の **Examination Building** に入れてもらえないということは、この試験が今でも伝統の形を保っていて、それだけ格式が高いことの証明でもあろうが、実はこれは形式ばかりでなく実質的にも大変な試験なのである。イギリスの卒業試験はどこも、資格試験のようなものである。他大学の教員も加わって試験委員会を構成し、採点、評価の結果、1st, 2nd, 3rd という等級をつける公的色彩の濃い試験である。こうなると、オックスフォード大学卒という肩書より、

1st であったか 2nd であったかという卒業成績が就職の際により物を言うというのもうなずける。

日本語試験は、このように私などがいっさいかわらない性質のものであるが、1年生の2回の試験は学習した範囲内で語学力中心のアチーブメント・テスト（聞き・話しは含まず）であった。卒業試験は翻訳（和→英、英→和）のテーマ別選択問題、古典、芥川「河童」、あとは専攻分野——近代文学、古典文学、歴史、美術、政治など——ごとの筆記試験など10科におよぶとのことであった。たしか文学の翻訳には永井荷風の文があった。

卒業試験を見てもわかるとおり、語学よりは文学、語学力に裏づけられた日本学的色彩が濃く、ふだんの勉強・授業にも学生の意識にもこの傾向が強かった。

Ⅲ. 教材・カリキュラム

まず、学年ごとに使用した教材は次のとおりであった。

1年生……(1) Reischauer: Elementary Japanese for College Students (現代表記に書き替えたもの) (2) Alfonso: Japanese Language Patterns (以下 JLP と略す) (3) Hibbett and Itasaka: Modern Japanese—A Basic Reader (4)安部公房「赤い繭」

2年生……(1) Alfonso: JLP (2)テーマ別プリント教材 (3)「今昔物語」、川端康成「雪国」、芥川龍之介「河童」など。

3年生……(1) Alfonso: JLP (2)テーマ別プリント教材 (3)専攻に応じて「更級日記」、歴史書など。

このうち、「雪国」、古典などは専任の担当であったので、私の使った語学教材を中心に、学年別カリキュラムとからめて授業の実際を述べてみたい。

1年生 (2名)

1 学期……(1) Ist-Year Readings in Modern Japanese というクラスではライシャワー：Elementary Japanese の文法・読解・漢字を週に3・3・1コマ（1コマ55分）の割合で3人の教師が担当。週に3課のペースで24課まで。25・26課は冬期休暇中の宿題。8週間で日本語の基礎文法が英人教師から与えられた。学期初めまでにひらがなを覚えることになっていたのが、第1週から新漢字30。音訓読み替えも与えるのでかなりの負担だが、学生は意外に平然とこちらの板書する字をノートに書き写していく。まだ学生は漢字を書き慣れていないので55分では足りないことも多かった。この教材はもっぱら基礎的な文法・文字・語彙・解釈のために作られており、ここでの使われ方もそうであった。(2) アルフォンソ：JLP は1課約5コマのペースで週2コマ。これは唯一の Colloquial Class で私が担当。ドリル・短文作り・応答練習、簡単な英文和訳など JLP に沿って口頭練習。例年は LL で JLP のテープを使ってドリルをするだけであったが、学生の要望もあり、こちらも native speaker らしい授業ができるとあって変更したものである。2人のうち1人がこの学生には珍しく、話すことに意欲的であったこともあり、順調にいったが、1学期で3課進むだけではいかにも少ない。1年生の間のよい基礎づくりのためにも週2コマでなく、5・6コマは必要と思われた。

2 学期……(1)ヒベット・板坂の Modern Japanese を、ライシャワーのあとを受けて使用。週に文法・読解6コマ、漢字1コマの配分で2課ずつ進む。漢字熟語が急に増え、1年生の2学期目としては歴大な量である。結局、1課ごとの試験などないから、学期中集中的に詰められるだけ詰めこんでおき、自習時間や休暇中にノートを見、辞書を使って牛の反すうのように繰り返して自分のものにしていく——これがこの学習方法であることがわかる。休暇中の宿題も多いわけである。(2) JLP 6~8 課を前学期と同じ使い方で。9課は次の学期までの宿題。

3 学期……(1)安部公房「赤い蔭」をヒベットのあと教材として使用。文庫本で数ページの短篇とはいえ、1年目の3学期ですすでに生の文学作品を読み教材とするわけである。語学教師としては前期のヒベット・坂坂などをもう一期使ったほうがいいと思うが、この科全体の文学的傾向と、2年生から始まる「文学」の読みへの第1歩としてこの作品が使われるようである。

2 年生 (3 名)

1 学期……(1) JLP 13課から16課までを週に1コマ、Colloquial Class で使用。17・18課は次の学期までの宿題。2コマで1課をあげるには文型の数が多すぎ、いくつか学生が困難を感じそうなものを取り上げて口頭練習。ほとんどの文型は2年生がすでに知識として持っているため、口頭で正確に使えないにしても新鮮味に欠け、しかも、他の読解教材とのギャップが大きすぎた。学生が口頭練習に慣れていないこともあってやりにくい授業であった。ここの学生ならなおのこと、口頭文型練習は1年生のうちに徹底してすべきであると思った。(2)テーマ別プリント教材……これは漢字クラス、Unseen クラス、Prose クラス1コマずつで扱う読解・英文和訳 (prose とよばれる) のための教材である。学生たちの専攻や関心を考慮に入れながら、この学期は「歴史」がテーマとして選ばれた。3コマのうち最初の1コマは漢字クラスで、週ごとの小テーマに基づく漢字熟語——明治維新、封建制度、幕府、中央集権など——を50前後与え、次の日それらをキーワードとして、当日渡された1～2ページの生教材からの抜粋プリントを英人教師と読む。その後、前もって渡してある同テーマの英文和訳 (短文もあったが、漸次長文になった) を学生は宿題として書いてきて、Prose Class で添削と解説を行なうということになる。これはなかなか面白く、有効な進め方であると思った。この学期は日本近代史が大テーマで、1週ごとに「明治維新」、「憲法の制定」、「文明開化」というように順を追って8テーマが扱われ

た。2年生用の *unseen* 教材は、小学5・6年生用の「自由自在」の歴史の項が使われたが、やや羅列的であるため学生はちがうタイプのものを望んだようであった。英文和訳は2年生用としては文型を考慮に入れてあり、それほど難しくなかった。It is a mistake to think that Japan suddenly became a modern state in the year of the Meiji Restoration, but progress was certainly rapid after it. のようなのがいくつも出されるのである。添削の対象になったのはこの段階ではほとんど助詞・活用形など文法が中心であった。

2 学期……(1) JLP は継続使用、19課から22課まで、週1回。(2)漢字・*unseen*・*prose* 用教材の大テーマは「日本事情」とかわり、1週ごとに「文学運動」、「美術」、「学生運動」、「労働問題」、「女性史」、「昔話」など。前の学期と異なり、*unseen* も英文和訳もそれぞれ日本語・英語で書かれた生教材からの抜粋となり量も難しさも増した。英文和訳は時に1ページに及ぶ英文の翻訳であるから、これを宿題として毎週こなさねばならない学生も大変なら、5分で解説しながら添削するこちらも必死であった。いかに朱を入れても「流れのいい文章」にならないことがあるため、別に私が書いた訳文をプリントして見本として渡すなどした。文法の直しや文体の統一のほか、翻訳の場合は辞書への依存度が高まるので、内容にふさわしい語彙の選択の問題がいわゆる作文指導の時よりも多く出てきた。日本での日本語教育ではほとんど考えたことのなかった「翻訳」という技能が国外の日本語教育ではかなりのウエイトで存在することをあらためて知ったのであった。

3 学期……(1) JLP 25～28課。(2) *Unseen*・*Prose* のクラスでは文学作品をテーマに3年生と全く同じ教材を使用。ジョージ・オーウェル「動物農園」、シェイクスピア「ハムレット」、イブセン「人形の家」、ホーソン「緋文字」などからの抜粋で邦訳のあるものばかり。邦訳は *Unseen* クラスで使い、*prose* は英語原文または英訳の和訳練習。古典である

「ハムレット」や「緋文字」は正直言って実力以上の難物であり、さすがに動じないイギリス人学生も Oh, dear! の連続であった。

3年生（4名）

1学期……(1) JLP 33・34課。35課は宿題。「は」と「が」の総まとめ、「～たところで」などまだ練習を要する文型がかなりある。が、最終学年でそれぞれの専門分野への関心が強まっているこの時期にこれらの練習をするのは双方にとって抵抗感があった。それでも、この学期は忠実に口頭表現の練習を行なった。(2)テーマ別プリント教材……2年生と同じ歴史教材で、unseen, prose とも歴史書、歴史読み物など生教材の抜粋を使い、prose はフルに1ページ。3年生になると、さすがに歴史の理解・知識もあり、漢字熟語の学習も少しは楽なようであった。

2学期……(1)文句とか要求とかほとんど言わない学生たちも、JLP を使わずあるテーマで話すことをしたいと言いつ出した。結局、週ごとのテーマに合わせてそれぞれが「日本の経済」、「日本の大学生」、「戦後日本の女性の地位」などの題を選び、準備してきたことを15分ほど発表、質疑応答をするという形をとり、JLP は接続詞のまとめのところなどを利用するにとどまった。この結果、同一テーマに基づく読解・翻訳・口頭発表といういい形ができあがった。(2)テーマ別教材……2年生と同じく「日本事情」。2年生から3年生への夏休み中のプログラムとして、南山大学での日本語研修があり、日本で過ごす2・3か月の体験と見聞が3年生の理解力と表現力に大いに物言っているのが Prose, Colloquial 両方のクラスで証明された。

3学期……3年生は、卒業試験の準備のため、ほとんど3・4週目から現われなくなる。例年のことだというが、3年間の1学期近くが消滅というのはいかにも惜しい。

以上で、オックスフォード大学の日本語教育がどんなものであったか、

おおよそおわかりいただけたかと思うが、実は、この他に、日本史の講義もあり、さらに古典、近代文学、政治など学生の専門別の tutorial の授業がある。これは英人教師の指導のもとにほとんどマン・ツー・マンで文献を講読していく独特の教育で、オックスフォード大学の教育の中心は tutorial にあると言ってよいであろう。

「日本語」教育としては、特に基礎段階における時間数、教材の組み合わせ、読み書きの重視などを取り上げていろいろ言うこともできようが、学習目的、学生の数と質、その他事情が異なることも考えなければ一方的批判になりすぎるであろう。早期「日本学」教育はこの伝統であって、学生たちによそと一味ちがう深みを与えており、彼らもそれを誇りにしている。

しかし、こうした教育はなんといっても能力と意欲の非常に高い少数の学生向けのものであり、そういう学生を相手とする時にこそ、実を結ぶことができると言える。平均的な学生にはどうであろうか。むしろ、もっともっと時間をかけた、普通の基礎的「語学」教育からの出発の方が効果があるのではないかと思わせる学生がいたのも事実である。

前述したように、在学中に日本へ研修に来られる時代である。オックスフォードにいるかぎり、話したり聞いたりする機会も少なく、だいたいにおいてそこにウエイトを置かない学生たちであるが、「読めるうえに話せる」ことに意欲的な学生もいるし、これからは増えていくことであろう。この点からも、特に語学専門家としての日本人専任講師がいればと思うが、これは予算と機構の問題として日本語科の中だけでは解決できないようである。

日産自動車が、オックスフォード大学に150万ポンドを寄附し、今秋 Nissan Institute of Japanese Studies が開設することになったことは、日本でも報道されてご存知の方も思う。

オックスフォードの、いや、イギリスの日本学の発展のうえで、この研

究所が大きく寄与するであろうことは明らかである。これを機会にオリエンタル・インスティテュートでの日本語教育にもいっそう陽が当たってほしいと願っている。

追記

オックスフォード大学の2学生が、この夏、南山大学での研修を終えて4日ほど私の家に滞在した。私が教えた当時は1年生であったが、この10月から最終学年の3年生になる。女子学生のはうは平安女流文学、男子学生は熱烈な労働党員のせいか近代政治一特に左翼一を専攻していると話していた。

1年生のころほとんど話せず、2人のうち1人は「話せない」日本語教育に批判的であった。7月に日本へ来た時、会話力においては一緒に来日したロンドン大学、シェフィールド大学の学生たちに大いに引けめを感じたとのことであった。しかし、8週間の日本滞在で2人の日本語は大きく進歩し、日本語ばかりで話したがった。

1年生の終わりのころ、1漢字につきすべての音訓一たとえば、「生」ならセイ・ショウ・き・なま・うまれる・いきる一を覚えるやり方に私はその根気に驚くとともに、無理な学習法ではないかと疑問をもったものであった。しかし、こうして日本へ来た彼らと行動をともにして、目に触れる看板、地図、掲示の読解に挑戦し、むしろ文字力、語彙力からくる自信をもって日常会話と、より知的な会話の力を着実にのばしている2人を見て、2年間の読み書き中心の蓄積がこういう形で表われたことに安堵を覚えたのであった。

(注) 1980年度からは JLP をやめ、学研の Japanese for Beginners と Japanese for Today を使うことになった模様である。